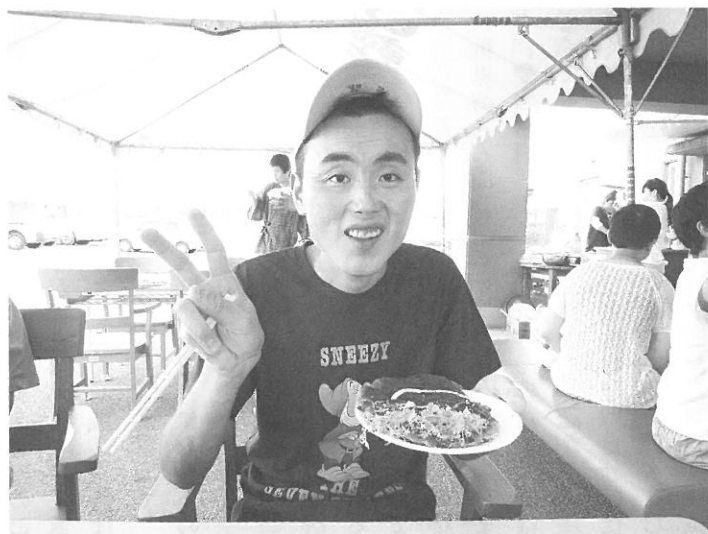




なが一緒にとりくんできました。開校から10年がすぎ、国際障害者年を記念して作られた映画が『ぼくらの学校』ですが、そのなかに田植えのシーンがあります。田んぼのぬかみにおそろおそろ足をつける子、泣き顔になっている子、泣いている子に寄ってくる子、ダイブでもしたのか顔にもからだにも泥をいっぴいつけて満足げな子、一人ひとりの子ども

もの表情が生きいきと映し出されます。田植えですから、苗を植えないといけないのですが、みんなが苗を植えているわけではありません。苗には見向きもせず、黙々と泥に手をつっこんでいる子もいます。実は、この撮影の数年後、大学院生だった私は与謝の海養護学校の田植えに参加しました。生まれてはじめての田植えにドキドキでしたが、ずっしりとした重みと、太陽の恵みを吸い込んだようなぬくもり、すべてを包み込んでくれるようにしっとりとしたどろろこの感触は今も鮮明に蘇ります。映画のなかの子も、いつも触っている砂や泥とはちがう、重みやぬくもりに心を動かしていたのかもしれない。そのうち、口もそーっと近づけていきます。

同じ田植えという場面で、同じ田んぼや苗という外界に対し、一人ひとりの子どもが異なるかかわりをする。ある子は、植えている苗がお米になったらみんなでカレーを作って食べたいと考えている。ある子は、どれくらいの間隔をあけて植えたらいいのかを考える。ある子は、先輩のやり方をみて一所懸命にまねようとする。ある子は苗には見向きもせず、どろんこの感触を確かめる。外界の取り込み方も、自分の関与のさせ方も異なっている。それは、発達段階のちがいという見方もできると思います。子どもたちは、それぞれの意図と創造性をもって外界に働きかけ、その結果を受け取ること、自分自身の内側を新たに作り変えていきます。それが発達という営みなのですが、その際の意図のつくり方や、創造性のなかり、結果の受け取り方



が、発達段階によって異なるわけです。
見ることも参加？

田植えのシーンでは、次のことも語られます。開校当初、コマ作りをはじめた頃は、肢体不自由が重く車いすに乗っている子どもた

『成人期』の『なかまたち』が 教えてくれること

5月号で、障害理解という観点と、発達理解という観点のちがいについて触れました。障害理解とは、子どもの抱える困難や不安の背景を科学的にとらえることであり、発達理解とは、徹底的にその子自身を主語にして、その子がなにをねがっているのか、なにとたたかっているのか、なにを変えようとしているのかを見ることではないかと書きました。そして、いずれが正解かではなく、両面から見ることで子ども理解が深まっていくのではないかと。今回は、発達のみにするという点について、とりわけ、発達段階をとらえることの意味を考えます。

映画『ぼくらの学校』の 田植えシーンから

1979年の養護学校義務制実施の10年前、1969年に与謝の海養護学校が開校しました。その学校づくり運動のなかで大事にしてきた理念の一つに「学校に子どもを合わせるのではなく、子どもに合わせた学校をつくらう」があります。これは、卒業後の作業所づくり運動では「仕事になかまを合わせるのではなく、なかまに合わせた仕事をつくらう」に引き継がれていきます。それから、約50年がたちましたが、学校でも作業所でもこの理念に何度も何度も立ち返って点検していく必要性を痛感しています。

この与謝の海養護学校で開校当初からとりくんできたことに「コマ作り」があります。小学部から高等部まで、肢体不自由の子どもも知的障害の子どもも先生も地域の人もみんな

第5回 「発達段階」をとらえる意味



滋賀大学 白石恵理子

しらishi えりこ / 1960年、福井県生まれ。大津市発達相談員などを経て、現在滋賀大学教育学部教授。おもな著書に『一人ひとりが人生の主人公』『しなやかにしたたかに仲間と社会に向き合って』『保育・教育のための発達診断』（共著）（いずれも全研出版部）『人間発達研究の創出と展開―田中昌人・田中杉恵の仕事を通して歴史をつなぐ―』（共著）群青社など多数。